



## 第八卷第三號

香

### 十七字詩

鹽野奇零

めれ髪に霜をく垢離の 冥りかな  
 春雨や 茶寮に暮るゝ園基の音  
 琴やみて人去りにけり 月おぼる  
 鯉はなつ池のまはりや さし柳  
 花鳥に 春おしうつる 二月かな  
 武士の 門にやさしき 柳かな  
 梅が香や 氣儘に暮らす 古稀の人  
 雨二日 ぼゝ笑む山の 景色かな  
 果てありて 果てなく見えぬ 野のかすみ  
 盆栽の 松の根じめや 福壽草  
 御書院を 明け放しけり 梅の花  
 我立てば 人も見て居る 霞かな  
 永き日や 鐘かぞへても  
 切風や 松の 梢に 風ぐるま  
 櫛入れる 産後の 髪や 蝶の 椽  
 三千の 美女は なくとも 梅に 月  
 切風や 草履片 手に 飛んで行く  
 遠足や 蝶舞ふ 野邊の 握り飯  
 蝶舞ふや 折々 覗く 乳母車  
 孝と 義を 樹には かりて 覗うり